

令和6年度 全鍍連経営委員会 「次世代を担う若手経営者のための 先輩経営者による講演会並びに意見交換会」を開催

令和6年11月15日に、全鍍連経営委員会主催の「次世代を担う若手経営者のための先輩経営者による講演会並びに意見交換会」を開催しました。めっき業界における先輩経営者を講師としてお迎えし、次世代のめっき業界を担う若手経営者に対しご講演頂き、講演後ダイレクトに意見交換を行う企画です。

第14回目を迎えた今回は、株式会社九州電化 代表取締役会長 山田登三雄氏（九州組合）より、約1時間にわたりご講演を頂き、参加者との活発な意見交換が行われました。今年度は同社での工場見学の後、博多サンヒルズホテルにて会場を移して講演会を開催しました。全国から29名の方が参加されました。



■講演「道」



(株)九州電化 代表取締役会長 山田 登三雄氏

●はじめに～九州電化との出会い

今日は「道」というタイトルで講演いたします。「道」という言葉は松下幸之助さんの著書「道をひらく」や、美空ひばりさんの「川の流れのように」の歌詞の中にも登場する言葉です。

さて、私の故郷は長崎県の五島列島です。父親は小学校の校長先生、母も教師でしたので、自身も将来は教師になるものと思っていました。

(有)九州電化工業所との関係は、大学時代に同級生だった家内（佳代子副社長）と硬筆クラブで知り合ったことに始まります。(株)九州電化の前身である(有)九州電化工業所は昭和35年に設立しました。脱サラで鋼材屋を営んでいた創業者（佳代子副社長の父）吉村義太氏は120坪の^{みのだ}箕田鍍金工業所の保証人になっていました。箕田氏の突然の死で資産の10倍の負債を背負うことになったのです。たくさん個人の借金もあり、その全部を必死に返し続け、現在の社領の土地1000坪を購入し、昭和49年、亜鉛工場増築中に、残念ながら49歳の若さで逝去されました。

●会社の立て直しからのスタート

家内の母である弘子氏は専業主婦でしたが、義太氏の急逝により会社を継がなければなりません。下の妹弟のためにも、家内は大学4年の夏、葬式の翌日から大学を欠席して会社に入る事になりました。単位はとっていたので無事卒業できました。(笑)

私は昭和50年に福岡大学を卒業した後、日立製作所に就職、その後結婚し、昭和52年に九州電化に転職しました。入社と同時に専務になりましたが、いきなり業界に入った私はめっきの「め」の字もわかりません。しかしやるしかありません。

そのころ亜鉛めっき薬品を納入してくれる、九州ジャスコ(株)の井本社長に大変可愛がっていただきました。そこで日本表面化学(株)を紹介いただき、神奈川の茅ヶ崎工場であつきの勉強をさせていただきました。

九州電化に入ってから、私は社長代理として会議や理事会に出席し始めました。厳しい先輩方もいらっしゃいましたが、打ち解けるにしたがい温かく色々なことを教えていただきました。また義太前社長は業界外にもたくさんのご友人がいましたので、その人たちから、「義母を助けなさい」、「必死に働きなさい」と発破をかけていただきました。そのなかで絶対に諦めないという気概が強くなったと感じています。

●中小企業経営の苦労

福岡地域でのめっきは建築用の大物が主でした。創業時の(有)九州電化工業所は小さな会社でしたが、九州電化が困っているからと福岡市内の(株)正信さんがお客様を紹介してください、助けていただきました。今でも大きな

売り上げをいただいている大事なお客様です。

昭和 58 年に現在の㈱九州電化を新たに設立しました。そのときに事務所ビルを新築したのですが、当時シリコンアイランドとして九州は半導体産業に沸いていました。福岡のめっき会社にも「半導体の仕事をしないか」という問合せが多く聞かれました。半導体の仕事を気になりつつ、それまで多品種少量の汎用めっき（亜鉛、装飾、銀、ニッケルめっき等）をしている会社だったので、多くの人数の確保と品質保証が心配で断ってしまいました。結果、半導体の世界には入ることはできませんでした。今はとても後悔していますが、半導体業界には波がありますので、もしかしたら会社が持ちこたえられなかったかもしれせん（笑）。

仕事を増やそうと必死でしたが、30 年前のある日、取引先から 3000 万円の不渡りをいただきました。このままでは会社が大変なことになるので、同年代の営業とトラックで相手会社へ乗り付けて、手ぶらでは帰れないということで結構積んで帰りました（笑）。中小企業には様々な苦勞がありますね。それでもなんとか前を向いて努力しました。

2005 年には福岡県西方沖地震がありました。そのときは 5 年に 1 度の海外社員旅行で上海にいました。震源は遠いながら心配して戻ってみると、3 階のラインの配管が割れ、70t の設備が 15cm 程、動いていました。次の日から愕然としながらラインを 3 週間止め、社屋や工場を含め多額の費用をかけて復旧をした、苦い経験があります。

●教育者としての道～指導者に必要な覚悟

教員一家で育ったこともあり、教育の世界が気になり、大学では企業経営者が務める客員教授もさせていただきました。色々なかたちで人の前で話をするが増えてきましたから、段々と慣れてきました。慣れればなんとかなる、と学生にも話しています。

山本五十六の「やってみせ」はご存知でしょうか。「やってみせ 言って聞かせて させてみて 誉めてやらねば 人は動かじ」の言葉は有名ですが、人材育成のお手本だと思っています。教える立場からはこのようではないといけないと私自身感じています。

指導するということは大変です。自分が思った通りになることはほとんどありません。ですが結局、私が思っていることもたくさん間違っていますから、物事を一緒に共有して考えてくれる人が傍にいてくれるような世界をつくり上げていかないといいません。つまり相手をパートナーとして考えないとうまくいかないのです。

中小企業の社長はほんの少し良いことがあります。ほとんど大変なことばかりだと経験して痛感しています。ですが、それをきついと思うか思わないかが分かれ目だと思います。私はこれをきついと思わないんですね。当たり前だと思っています。最初会社に入ったときに会社の中で怖いと思っていた人も、段々と近づくうちに相手が分かってくる。少しずつ少しずつ近寄っていくことが必要です。そうしないと言いたいことも言えなくなってしまいます。そんなことをしているうちに、福岡県市民教育賞をいただきました。

●経営者としての道～運と縁

さて、入社した日からいきなり専務でしたから、経営者としての道がどんなに大変かはよく知っています。

中小企業は同族経営が多いです。一般的に中小企業のイメージは「保守的」「経営が独善に陥りやすい」「人材面で活力を生むのが難しい」「優秀な人材を集めにくい」と言われています。つまりこれと異なることをすれば、非常に良くなるということです。

一番強く感じていることですが、人生の中で99%は運と縁だと思っています。1%の努力と99%の運と縁ですね。努力をしないと運と縁に気づかずに通り過ぎてしまいます。運と縁は表裏一体ですし、出会いが運命を変えるのも「道」だと思っています。ぜひ皆さんも運と縁をしっかり掴んでください。

九州電化は多品種少量のめっき屋です。個々の売上は高くはありません。儲かるわけではないのですが、同じ地域で頑張っている大きなめっき屋さんを見て、気持ちだけは「ここで諦めるわけにはいかない」「近づこう」と思って奮起しています。

そう思いながら働いていたなかで、私の人生を変えた出会いがありました。まずは弊社の技術開発部の中野寛文部長です。私と同級生ですが、他社で研究員として働いていたところ家族の事情で福岡に戻ることになり、大学の恩師の紹介で九州電化に来てくれました。この出会いから、九州電化では研究開発に着手します。中野部長の開発のうち、特に某メーカーの漏電遮断器の部品の銀めっきの素材を銅から鉄に変える画期的な技術は現在でも会社の中でトップクラスの売上を誇っています。最近では脱カーボンでの水素利用の

技術に関連したエネファーム部品も担当しました。これは燃料電池の腐食環境下における電気接点の長寿命化がテーマで、今まさに実機テスト中の案件です。ちなみに中野部長は平成24年に「現代の名工」、令和5年に黄綬褒章を受章しました。

また元トヨタ自動車九州理事の藤田憲一氏にもご縁をいただきました。弊社工場ラインへ非常に熱心な指導いただき、効率化のためのカイゼンを教えていただいています。



●希望ある人生を

人生はあなただけのかけがいのない唯一の道です。一度しかない希望ある人生、前に向かって、あなたの新しい道を創っていくのです。他人に惑わされることはありません。臆することもありません。経営者の皆さん、自分を信じて、ひたすら自分の道を進んでください。





研修会の様子

■意見交換会の主な質疑

Q. ここまでの人生を振り返って、失敗したことや後悔したことはありますか。

A. 私は臆病で弱気で心配性な性格です。ですが、そこで諦めたらいけないという気持ちも強いので、世の中に失敗はない、必ず成功するという思いで突っ走ってきました。



■おわりに（事務局より）

ご自身が重ねられた経験から、経営者、また指導者としての様々な「道」についてご講演をいただきました。若くして経営者とならざるをえなかった大変なご苦勞のなかでも、覚悟を決めて努力を怠らず、常に前向きに人との繋がりを大事にされる姿勢に「運と縁」を引き寄せる力強さを感じました。

この度、講師を引き受けて頂いた山田会長へ、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。